河原田遺跡発掘調査の記録Ⅳ

桒　原　将　人

1．経緯と目的

筆者らは、1965年（昭和40年）に愛知大学が発掘調査を実施した豊川市河原田遺跡の出土遺物を整理し、重要と思われる土器を精選して報告することを進めており（本誌第58～60輯所載、以下「前三稿」と呼ぶ）[(1)]、今回はその第4回目である。

前三稿では弥生時代中期までの主要な土器83点について資料化を行なった。今回はその続編として弥生時代後期の土器を取り上げ、報告する。今回紹介する土器は、出土地点はある程度把握できるものの、出土遺構や出土状態は不明で、資料の一括性を保障できるものではない。したがって、以下においては、先学による編年研究を参照のうえ、弥生時代の「後期初頭」「後期前葉～中葉」「後期後葉～後期末（古墳時代初頭も含む）」といった大別時期ごとに記述を進める。遺物の特徴からある程度時期が絞り込める場合はそれも記述する。なお、遺物実測図は縮尺3分の1もしくは4分の1で掲載し、図版ごとにスケールと縮尺を示している。

2．弥生時代後期初頭の遺物

八王子古宮式（赤塚2002・宮越2007）の段階に相当する時期（弥生時代後期初頭）の所産と考えられる遺物には、**84**～**93**（第30～31図）がある。

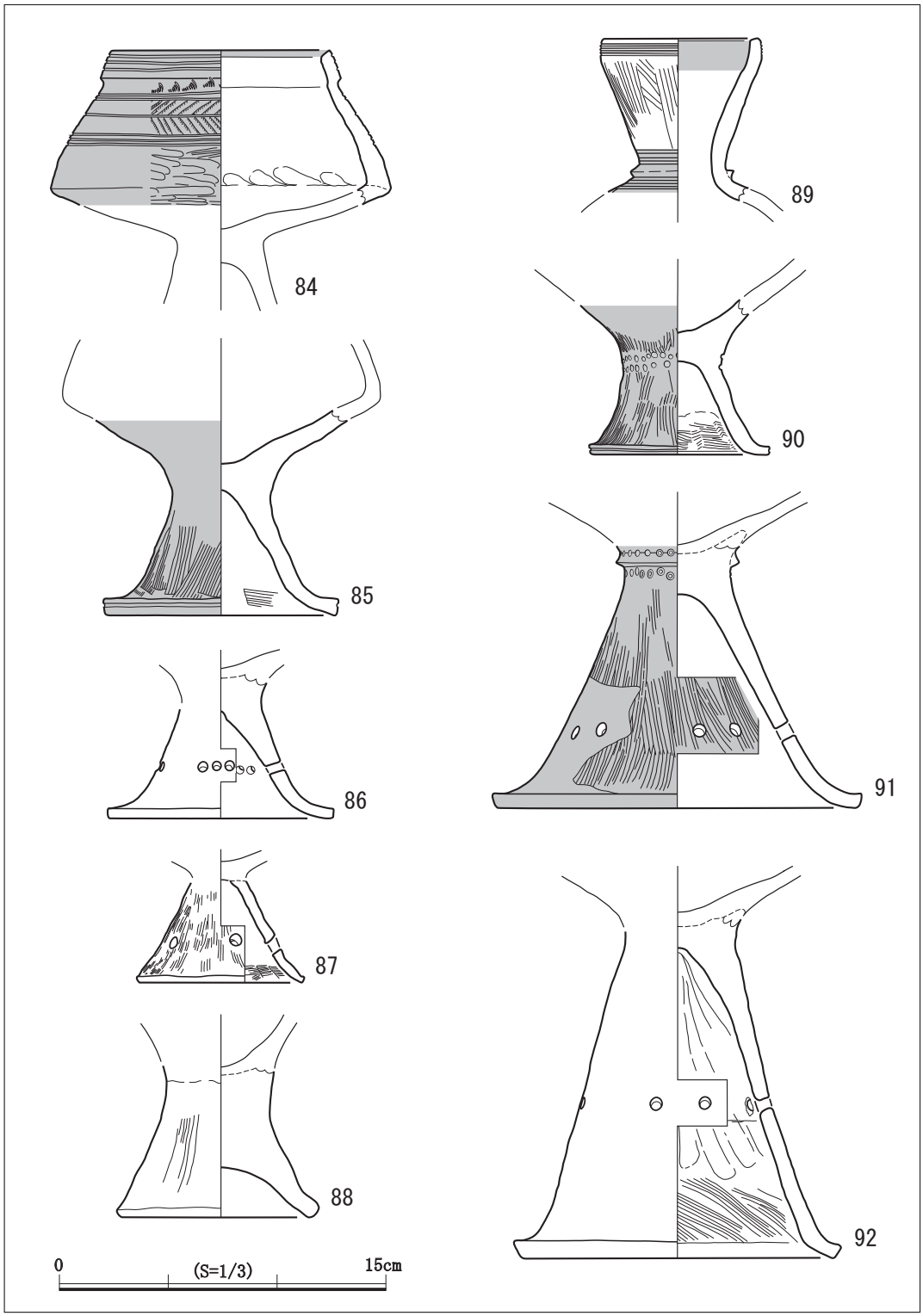
84は台付鉢である。口縁部は屈折して内傾し、端部には面をもつ。口縁部から体部上位にかけて、櫛による直線文をめぐらし、その区画内を扇状文や羽状文で飾る。体部中位はハケ調整の後、丁寧なミガキ調整を施し、ハケの痕跡を消している。口端面から外面全体にかけて赤彩を施す。

85は台付鉢の脚台部である。八字状に開くもので、裾端面を垂直に面取りし、1条の沈線をめぐらす。外面全体に赤彩を施す。

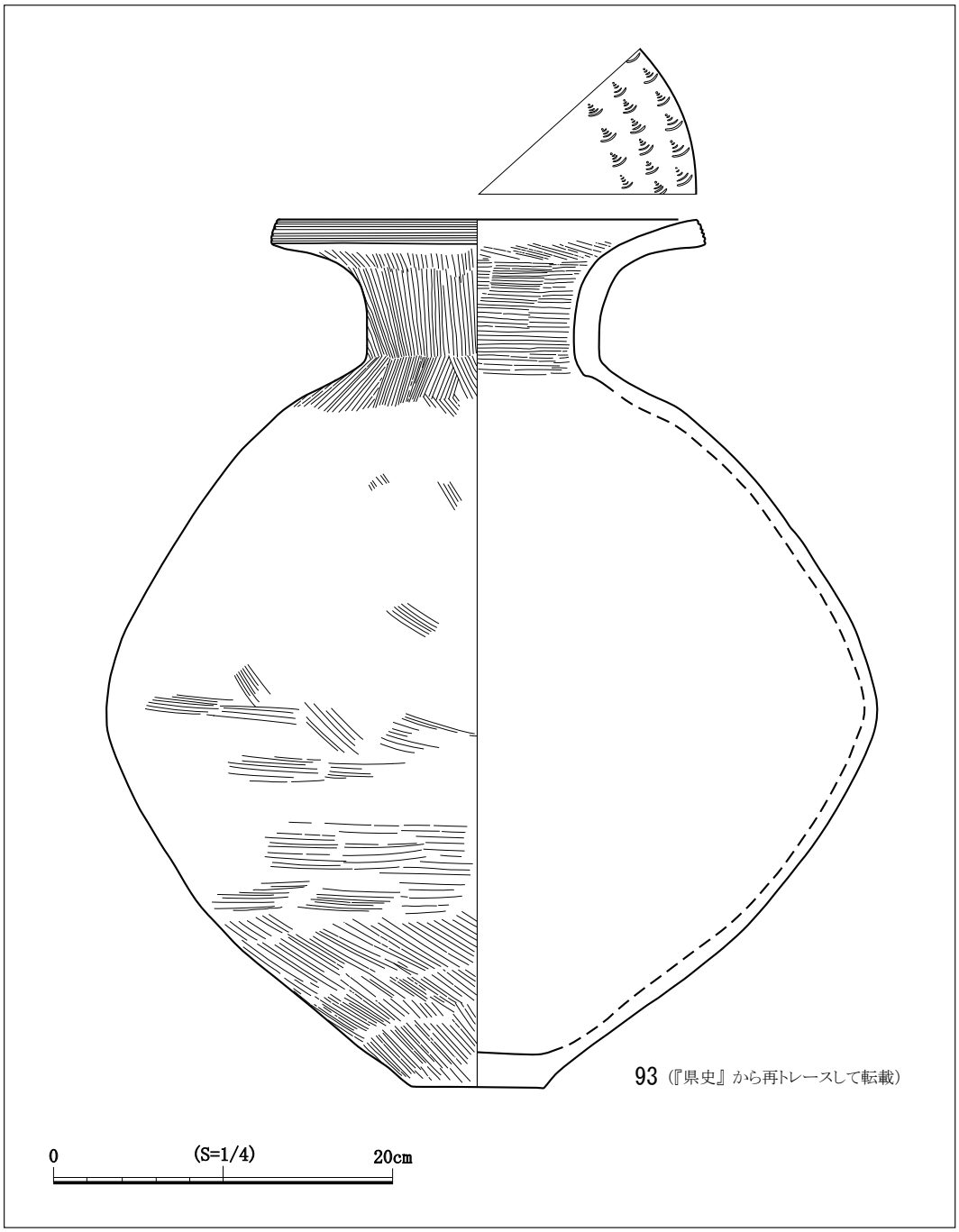
86は小型高坏の脚部と推定されるが、台付鉢の脚台部である可能性もある。八字状に開くもので、裾端面を垂直に面取りする。3個1単位のスカシ孔を4方向に開けるが、なかには未貫通に終わっている箇所もある。外面には赤彩の痕跡が認められる。現状では痕跡程度だが、赤彩は外面全体にわたっていた可能性もある。

87は、小型台付鉢か小型高坏の脚台部である。直線状に開くもので、裾部でわずかに外反し、外傾する端面をもつ。内外面ともハケ調整で丁寧に仕上げており、5方向にスカシ孔を開ける。

88は台付甕の脚台部である。中実の柱状に近い形状を呈し、裾部は短く外反する。八王子古宮式の範疇として捉えることができるが、前段階の要素も残す。



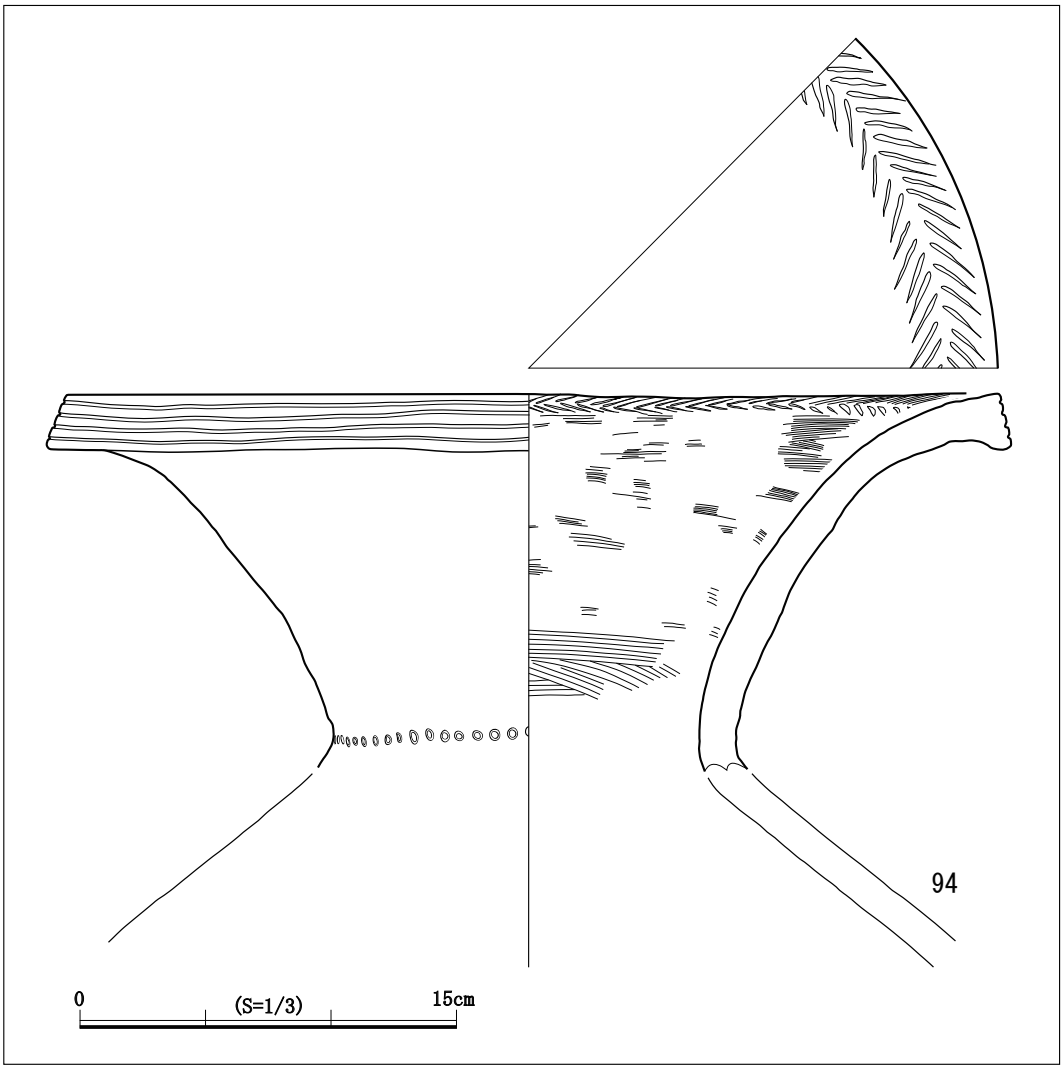
第30図　遺物実測図（弥生時代後期初頭）



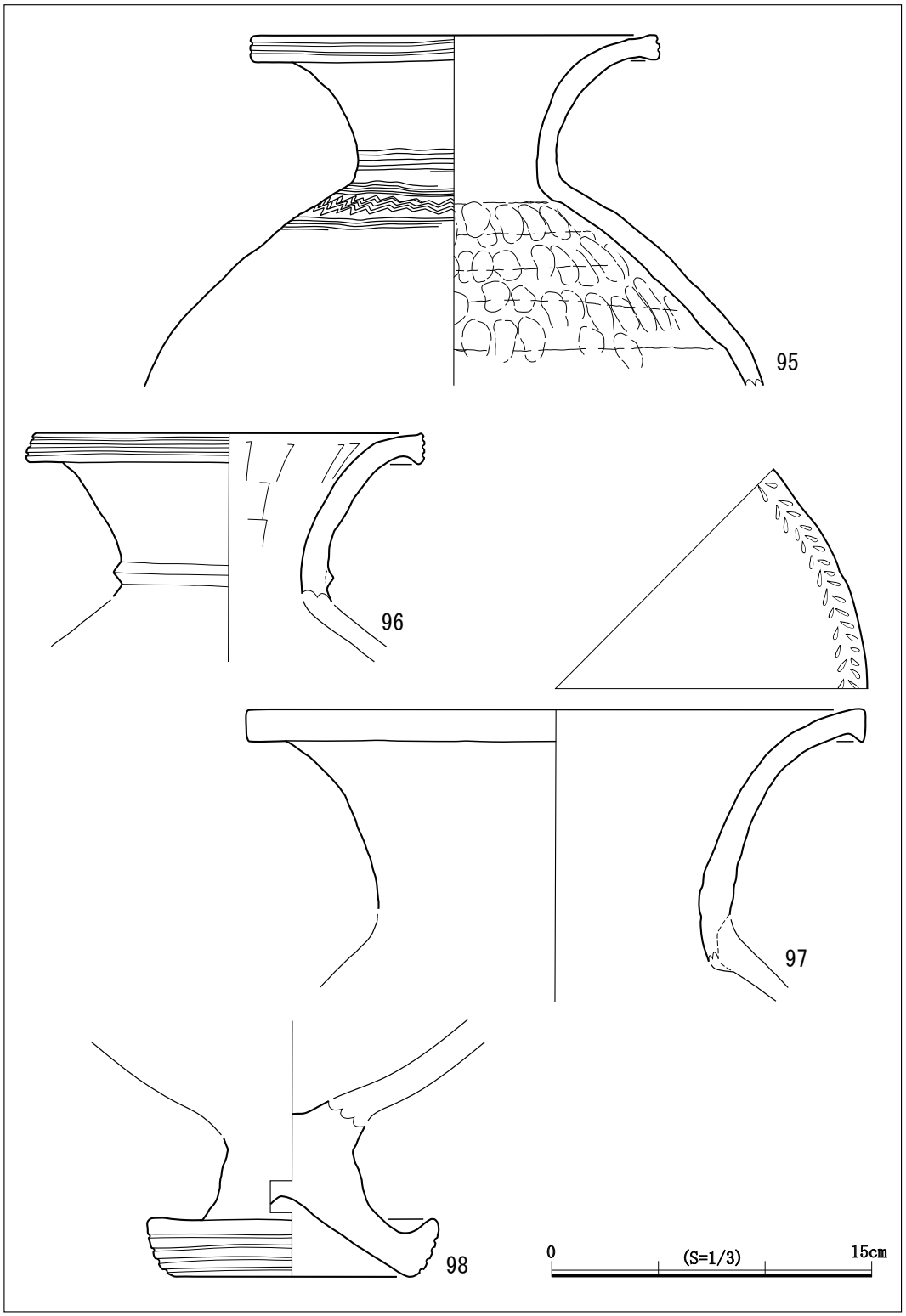
第31図　遺物実測図（弥生時代後期初頭）

89 は豊橋市の内田貝塚で類例が出土している赤彩を施した長頸壺である。口縁部は細長く直線状に開き、端部を直立させて上向きの口端面をつくる。口縁端部は櫛による直線文で飾り、頸部には突帯を挟んで上下に直線文をめぐらす。口縁部内面と頸部外面に赤彩を施す。赤彩は現状ではこの部分にしか認められないが、より広範囲にわたっていた可能性もある。

90 は台付壺もしくは台付鉢の脚台部である。八字状に開くもので、裾端面を垂直に面取りし、１条の沈線をめぐらす。脚台接合部には円形刺突の列を２段めぐらせて飾る。外面全体に赤彩を施す。



第32図　遺物実測図（弥生時代後期初頭～前葉）



第33図　遺物実測図（弥生時代後期前葉～中葉）

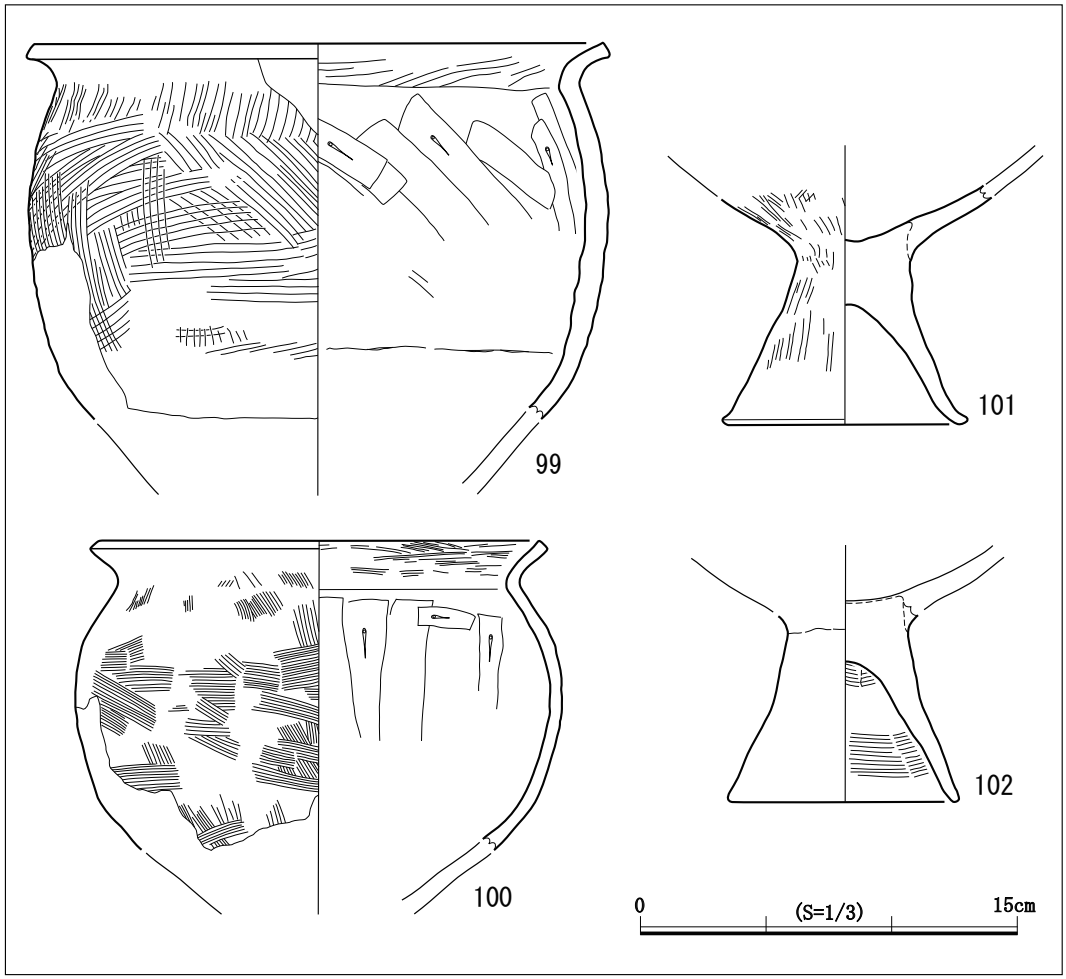
91 は高坏の脚部である。八字状に開くもので、裾端部に面をもつ。２個１単位のスカシ孔を５方向に開ける。坏部と脚部の接合部に突帯をめぐらせ、その上下を竹管状の刺突列で飾る。外面全体に赤彩を施す。

92 も高坏の脚部である。開きは小さく、直線的に脚を伸ばし、裾部を短く外反させて、端部には面をもつ。２個１単位のスカシ孔を４方向に開ける。内面はハケ調整のままだが、外面はハケ調整を行なった後、それを丁寧にナデ消して仕上げる。

93 は広口壺である。頸部を直立気味に立ち上げてから、口縁部をゆるやかに開く。口縁端部に面をつくる。口端面には４～５条の横線をめぐらす。帰属時期は寄道様式古段階に下る可能性もあるが、肩がやや張り、胴部もまだ球状化していない器形から八王子古宮式の段階に相当する時期の所産と捉えておきたい。

３．弥生時代後期前葉～中葉の遺物

寄道様式段階（弥生時代後期前葉～中葉）の所産と考えられる遺物には、**94** ～ **106**（第32 ～ 36 図）がある。



第34図　遺物実測図（弥生時代後期前葉～中葉）

94 は広口壺である。口縁端部をやや垂下させ、端面には横線をめぐらす。口縁端部の内面には羽状文を施す。頸部には竹管状の刺突列をめぐらす。頸部の屈曲もまだゆるやかで、帰属時期は八王子古宮式段階に遡る可能性もあるが、とりあえず寄道様式古段階の所産と捉えておきたい。

95 も広口壺である。ゆるやかに開く口縁部で、端面に横線をめぐらす。頸部から肩部にかけての文様帯は櫛による直線文と波状文を組み合わせる。体部内面には、粘土紐の継ぎ目と、ユビ押圧による整形の痕跡が明瞭に認められる。

96 も広口壺である。口縁端部を垂下させ、端面には横線を施す。頸部には突帯をめぐらす。口縁部内面は板ナデで調整する。

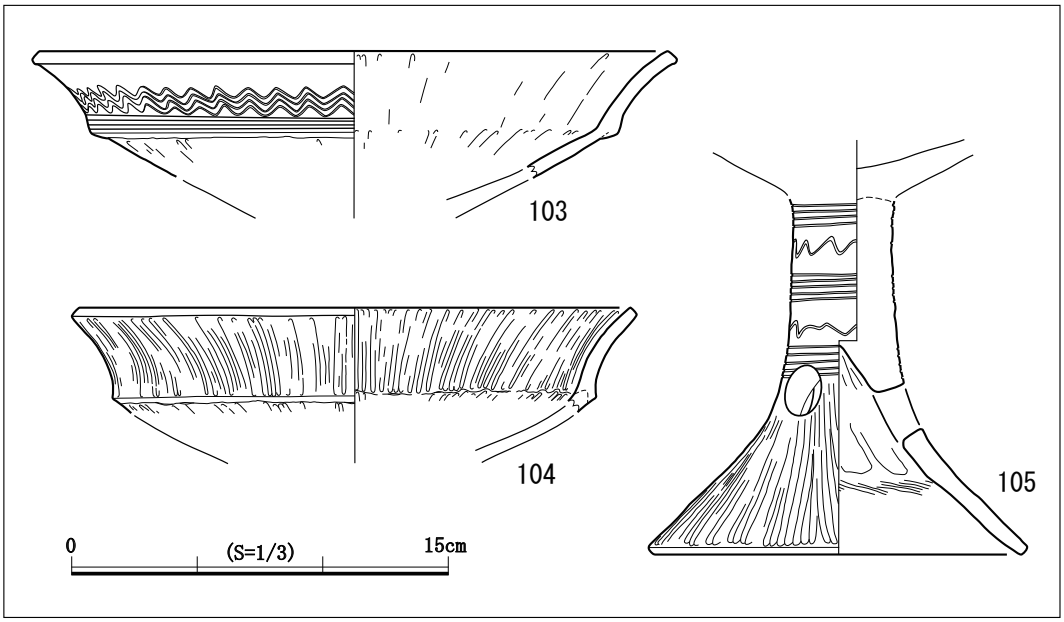
97 も広口壺である。口縁端部を垂下させ、端面をほぼ垂直につくる。口縁端部内面には羽状文を施す。

98 は広口壺の脚台部である。裾を接地部分で折るようにして裾端部の上角を外上方に延ばす。裾端面には４条の横線をめぐらす。

99 は、く字状口縁台付甕である。口頸部をゆるやかに屈曲させ、その外面を強くヨコナデする。口縁端部に面をつくるも、端面に刻みは施さない。体部外面にはハケ調整を施し、内面には頸部付近までケズリ調整を行なう。以上の特徴から、この甕の帰属時期は八王子古宮式段階に遡る可能性もあるが、頸部の屈曲が弱いので、とりあえず寄道様式古段階の所産と捉えておくのが無難だろう。

100 も、く字状口縁台付甕である。口縁部はやや内湾気味となり、口縁端部に面をつくるも、口端面に刻みは施さない。体部の外面はハケ調整、内面はケズリ調整で仕上げる。

101 は台付甕もしくは粗製台付鉢の脚台部である。八字状に開く脚台部で、強いヨコナデによって裾部をわずかに外反させる。寄道様式古段階の所産と推定されるが、八王子古宮式段階に遡る可能性もある。



第35図　遺物実測図（弥生時代後期前葉～中葉）

102 も台付壺か粗製台付鉢の脚台部である。直線状に開き、内面にはハケ調整を施す。

103 は、有稜高坏の坏部である。口縁部は大きく外反し、端部には面をもつ。外面を櫛による直線文や波状文で飾る。内面には縦ヘラミガキ調整を施す。寄道様式新段階の所産と考えられる。

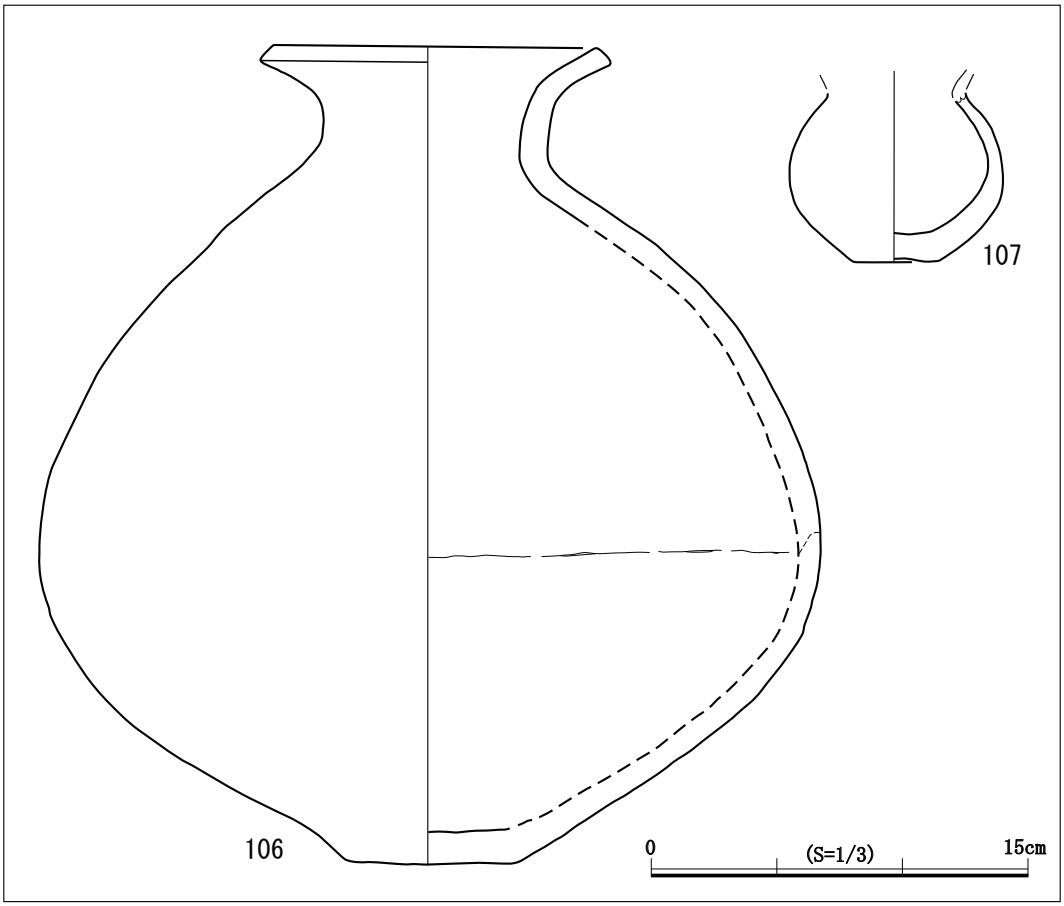
104 も、口縁部が外反する有稜高坏だが、外反度は弱い。口縁端部に面をつくるが、やや丸みを帯びたものになる。外面・内面とも縦ヘラミガキ調整で仕上げる。

105 は高坏の脚部である。脚部上半には櫛による直線文と波状文を交互にめぐらせる。脚部中位に円形のスカシ孔を３方向に開けるが、穿孔位置は不揃いである。

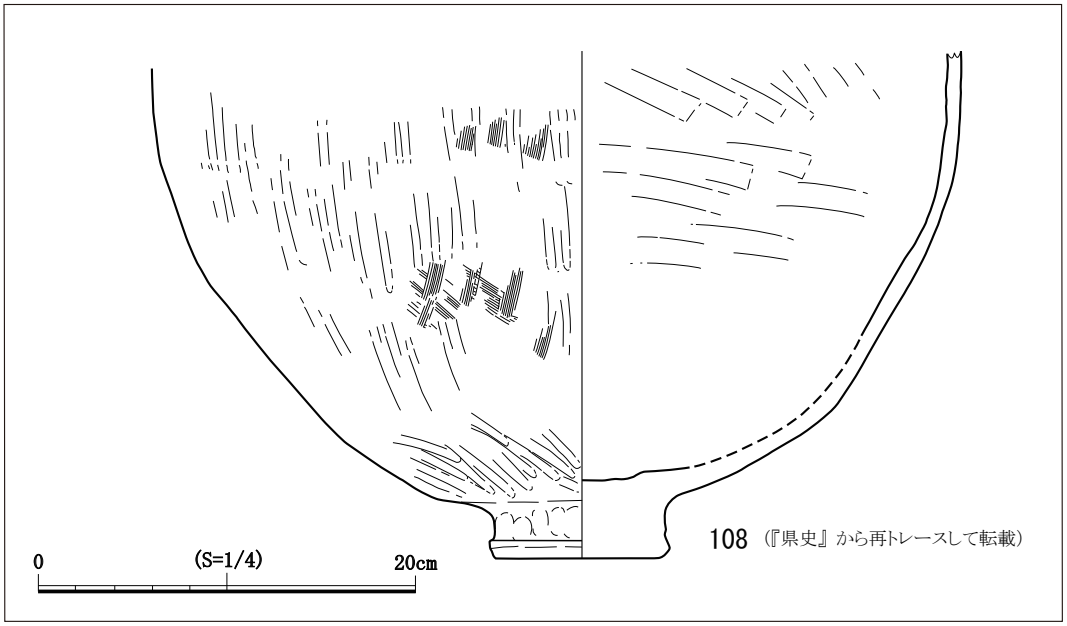
106 は広口壺である。口縁部は頸部から立ち上がって全体的にカーブを描くように開く。直線的ではない。口縁端部に面をつくるが、やや丸みを帯びたものになる。寄道様式新段階の所産とみなすことができる。

107 は小型の壺である。体部は球状を呈し、底部はわずかに輪状となる。帰属時期は弥生時代後期全般が想定され、詳細な時期を明らかにすることはできない。

108 は大型の広口壺である。胴部下半が遺存するばかりだが、長胴になるような印象を受ける。突出する底部を持つ。この壺も弥生時代後期全般の枠内に属するもので、詳細な時期の特定は困難である。時間幅を持たせて捉えておきたい。



第36図　遺物実測図（弥生時代後期）



第37図　遺物実測図（弥生時代後期）

４．弥生時代後期後葉～後期末の遺物

欠山様式段階［弥生時代後期後葉～後期末（古墳時代初頭も含む）］の所産と考えられる遺物には、**109** ～ **117**（第 38･39 図）がある。

109 は、く字状口縁台付甕である。口縁端部は先細りして丸く、面をつくらない。口縁部外面はヨコナデ調整で仕上げるが、その他は外面・内面ともにハケ調整を基本とする。帰属時期は寄道様式新段階～欠山様式古段階の枠内に比定されるが、とりあえず本稿では欠山様式古段階の所産と捉えておきたい。

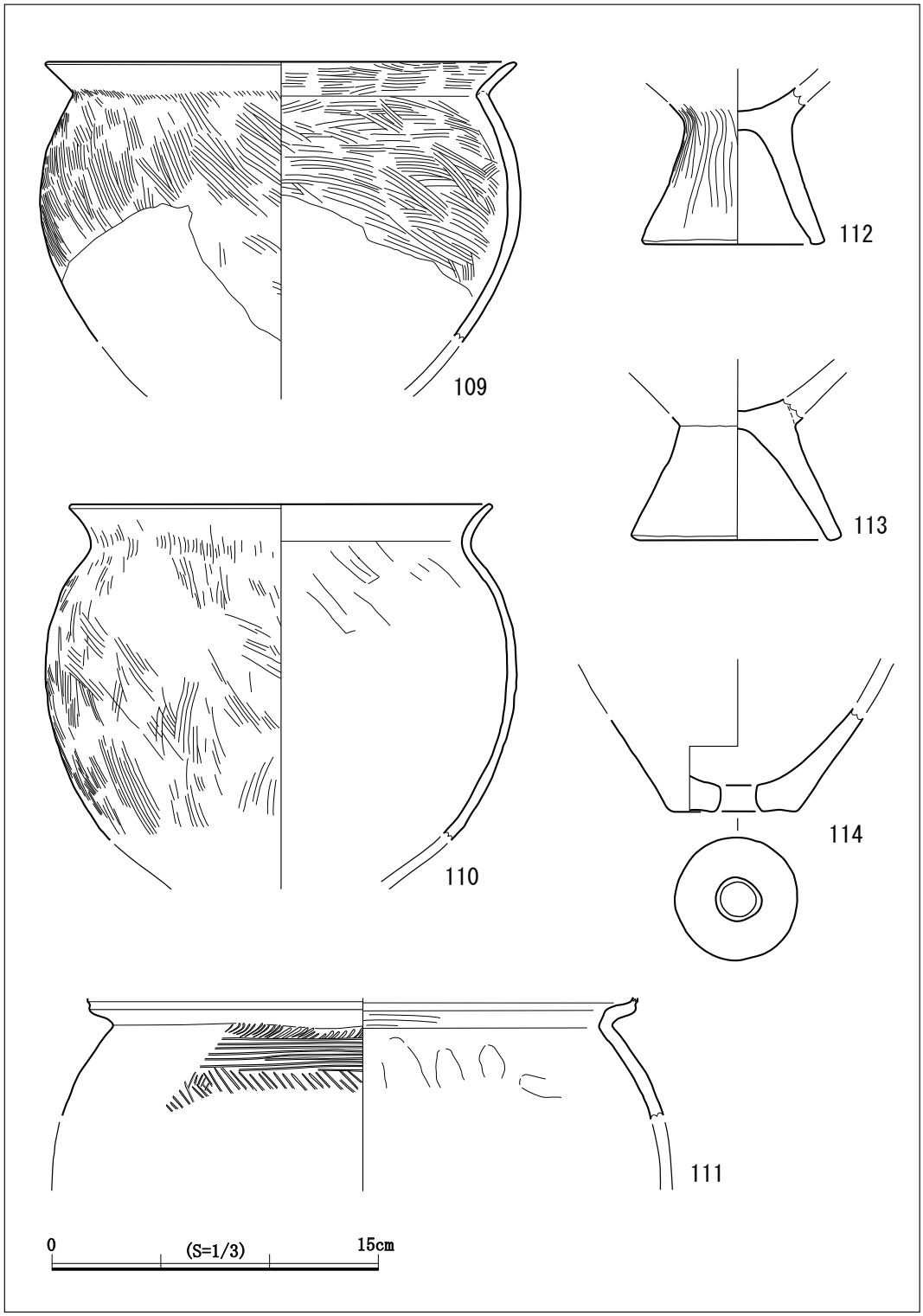
110 も、く字状口縁台付甕である。口縁端部は均質的に仕上げられておらず、強いヨコナデによって先細りする箇所もある。体部外面はハケ調整、体部内面は板ナデ調整を基本とし、器壁を薄く仕上げる。

111 は、Ｓ字状口縁台付甕の模倣品である。口縁部はＳ字状を呈するが、先端を欠損しており、端部の形状は不明である。通有のＳ字甕とは異なり、器壁が厚く、やや粗雑なつくりをなす。欠山様式新段階に位置付けられる。

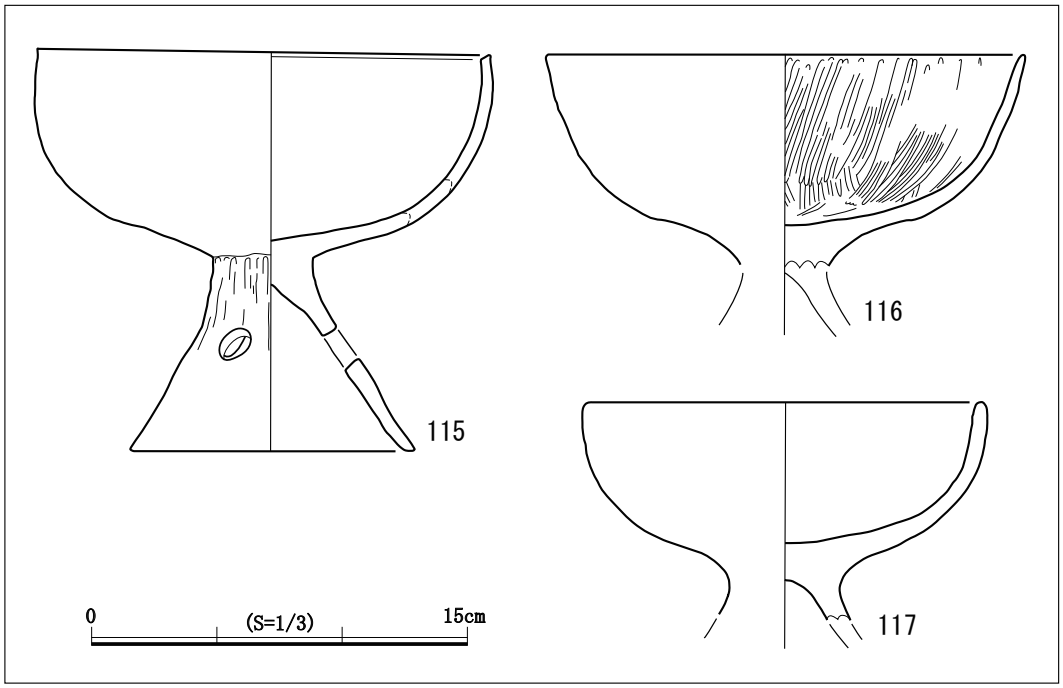
112・**113** は台付甕の脚台部である。寄道様式段階～欠山様式段階の特徴を示すが、詳細な時期決定はできない。**112** には明瞭なハケメの痕跡が認められる。

114 は有孔鉢である。碗形で、厚手の底部に焼成前の穿孔を施す。

115 ～ **117** は碗形高坏である。**115** は口縁端部に内傾面が認められる。**116** の口縁端部は内傾面が不明瞭となる。**117** は厚手の口縁部で端部を丸く収める。



第38図　遺物実測図（弥生時代後期後葉～後期末）



第39図　遺物実測図（弥生時代後期後葉～後期末）

5．結びにかえて

成果　本稿では、河原田遺跡出土遺物のうち、前三稿で紹介し得なかった弥生時代後期の主要な土器について報告を行なった。その結果、後期初頭の八王子古宮式の段階に相当する時期の土器（**84** ～ **93**）が少なからず抽出できたことは注目すべき成果といえる。当該期の土器は、東三河地域ではまだ類例が少なく、この地域における弥生時代後期の土器編年を考える上での新資料を提示できたことの意義は大きい。

課題　前三稿と本稿をもって、河原田遺跡において特に重要と思われる土器117点を報告することができた。これで7年間にわたる整理作業をひとまず終えることになる。このことには安堵の念を覚えるが、前三稿と本稿では、重要遺物の資料化に主眼を置いたため、遺跡の評価を取りまとめるには至っていない。資料化できた117点の土器からは、河原田遺跡の造営期間が弥生時代の前期末から後期末まで切れ目なく長期間に及んでいることや、河原田遺跡が東西にわたる広域な交流網をもった安定的な集落経営をしていたことがうかがえた。筆者は以前、東三河における弥生遺跡の消長と外来系土器にみる地域間交流に着目して、弥生時代中期までの河原田遺跡の評価について言及したことがある[(2)]。これにより、遺跡の評価を行なう目的の幾許かは達成されたが、なお弥生時代後期も含めた河原田遺跡の性格について検討を加える必要がある。また、本稿で4回目となる報文も、できれば一括することが望ましい。稿を改めて取りまとめを行ないたい。

謝辞　本稿を成すにあたり、鈴木とよ江・前田清彦の両氏には懇切なご指導を賜った。朝倉留美・森田亮子の両氏からも多くのご助力をいただいた。記して謝意を表したい。

註

（1）　桒原将人（2013）「河原田遺跡発掘調査の記録Ⅰ」『愛知大学綜合郷土研究所紀要 第58輯』愛知大学
桒原将人（2014）「河原田遺跡発掘調査の記録Ⅱ」『愛知大学綜合郷土研究所紀要 第59輯』愛知大学
桒原将人（2015）「河原田遺跡発掘調査の記録Ⅲ」『愛知大学綜合郷土研究所紀要 第60輯』愛知大学

（2）　筆者は、2016年5月28日に開催された愛知大学綜合郷土研究所の公開講演会において「河原田遺跡発掘50年」と題して発表した。弥生前期の集落が中期に入ると次々と終焉を迎えていくなかで、河原田遺跡は継続して集落を存続し得たことなどを述べた。詳しい講演内容については、下記の講演録を参照されたい。
　桒原将人（2017）「河原田遺跡発掘50年」『愛知大学綜合郷土研究所紀要 第62輯』愛知大学

参考文献

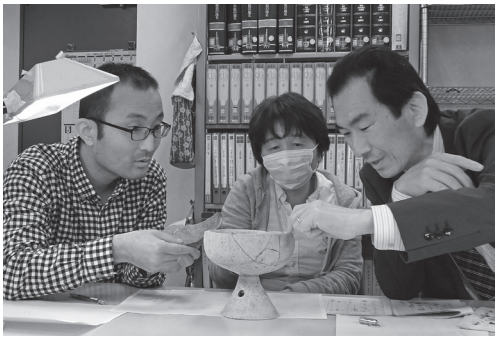
赤塚次郎（2002）「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡 考察編』愛知県埋蔵文化財センター

前田清彦・鈴木とよ江（2002）「三河地域」加納俊介・石黒立人編『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社

加藤安信（2003）「河原田遺跡」愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編２ 考古２ 弥生』愛知県

石黒立人・宮腰健司（2007）「伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課題」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会

松本泰典ほか（2010）「内田貝塚（Ｂ・Ｃ地区）」『内田貝塚（Ⅱ）・若宮遺跡（Ⅲ）』豊橋市教育委員会



資料の検討

整理作業の様子